

不条理な世界 どう生きるか

静寂の響き

中学生のころ、ラジオから流れてくるサイモン&ガーファングルの『サウンド・オブ・サイレンス』に夢中になった。歌詞はとても難解で深遠と言われたが、中学生に意味など分かるはずもなく、ひたすらハーモニーの美しさと英語の響きに魅了された。

中学生のころ、ラジオから流れてくるサイモン&ガーファングルの『サウンド・オブ・サイレンス』に夢中になった。歌詞はとても難解で深遠と言われたが、中学生に意味など分かるはずもなく、ひたすらハーモニーの美しさと英語の響きに魅了された。

私見創見

大人になり、聞き馴染

（なじ）んだこの歌に疑問が芽生えた。そもそも「静寂の響き」というタイトルが矛盾だ。ユダヤ系アメリカ人である彼らは、現実的な物理現象として「静寂の響き」を歌っているに違いない。

音などあるはずがないから。これは不条理だ。そう思ったとたん、目の前が開けた。

現世は不条理に満ちている。世界中で起きる大災害や大虐殺、戦争、テロリズム

ムは、多くの無辜（むこ）の人命を奪う。

不条理こそ現実なのではないか。条理と不条理が逆転する状況の中では、「静寂の響き」が、むしろ本当

のことなのかもしれない。

2011年9月11日、ニューヨークのグラウンド・ゼロでの式典で、ポール・サイモンは『サウンド・オブ・サイレンス』を歌った。同時多発テロ犠牲者への祈りを捧（ささ）げるために集まった人々は、不条理の存在を受け入れるかのように聞き入った。その様子は、まるでこの歌の一節そのものを思わせた。「人は目を傾げることなく聞

いた」

「目を傾げること（リスン）」と「聞くこと（ヒア）」とを、厳密に定義付ける議論がある。音楽家のダニエル・バレンボイム（1941〜）と思想家のエドワード・サイード（1935〜2003）が対談した、『音楽と社会』（みすず書房）である。

バレンボイムとサイードは、「リスンはできても、ヒアは難しい」と意見が一致する。なぜなら、ヒアは「聞いて知る」「理解する」「同意する」という、全人格的な行為を意味するからだ。

ユダヤ人のバレンボイムとパレスチナ人のサイード。それぞれに歴史的、政治的に深刻な背景を持つ二人だが、肝胆相照らす仲間だ。共通点は、非ヨーロッパ人ながらも西欧のクラシック音楽を愛したことだ。二人は音楽を媒介にして対話を交わした。

「サウンド・オブ・サイレンス」のように、世は不条理に満ち満ちている。対立する者同士が、相手をヒアするのは難しい。バレンボイムとサイードのように対話が成立するためには、忍耐と友情、それを裏付ける高い知性が求められる。

白血病を患い死期が迫ったサイードは、バレンボイムを自宅に招き、バッハの『平均律クラヴィア曲集 第一巻』第8曲変ホ短調前奏曲をリクエストした。

音符と休符が交差する、不思議な響きの曲である。どちらかというところ、休符の空白が支配的である。サイードは、人生の最期に「静寂の響き」を求めたのかもしれない。



石橋 司

石万代表取締役